日本近代文学会　関西支部
会報　三五号
二〇二二年五月一日

会報

［巻頭言］

研究者の力量

佐藤　秀明

新型コロナウイルスの影響で、オンラインの会合が一気に広まり、その長短がしばしば話題になっている。関西支部では、仕方なしにオンラインで大会を開催したが、意外に便利だし出かける手間や時間が省けるという声を聞く。遠方の会員外の人をゲストに招くのも簡単だし、交通費の節約にもなる。

運営委員会もオンラインになって、出席するのが手軽になった。ここでも委員の交通費の節約になっている。

しかし、マイナス面もある。大会の準備はかなりたいへんだ。パソコンやカメラやマイクのテストをしなければならない。このテストにしろ、会報などの案内の発送作業にしろ、多くの運営委員が集まるのは危険なので、一部の委員に負担が偏ることになる。その人たちには感染の怖さもある。

オンラインの会合では、質問や意見が言いやすくなったようでもあり、言いにくくなったようでもある。これはオンラインに対する個人の慣れの問題かもしれない。

ともかく学会から人の集まりがなくなり、休憩時間の雑談がなくなり、懇親会がなくなって久しい。人と会ったり顔を合わせたりすると、一種の「圧」が生じるから、その煩わしさが軽減されて楽になっているのだが、どうもこの楽な面に、あるいは省略し節約したところに落とし穴があるような気がしてならない。こんなに楽になってよいのだろうか。

そもそも学問や研究をするのは、楽ではない。楽をすれば、それだけ質は下がるだろう。また研究には、手間もお金もかかる。様々な環境にいて学問や研究に携わっている人がいるので、言い方が難しいが、研究をする上で楽な方に流れ、手間もお金もかけず、人と会う面倒も避けるやり方では、大成は見込めないのではないか。

私自身、大学院時代には住居費や生活費、授業料などすべての費用をアルバイトと奨学金で賄っていた。だから金銭を稼ぐために労力と時間を取られ、それは研究者としての弱点だと思っていた。何とか破綻せずに済んだが、周囲を見渡すと、病気や家庭問題やそのほかいろいろな負荷やしがらみを抱えながら勉強している人たちがいるのを知った。

オンラインで浮いた金銭や時間や労力を学問に充てるのならば結構だが、浮かせることばかりに走るのは考えものである。私たちは、逆にもっともっとカネと時間と労力を学問や研究につぎ込むべきではないだろうか。もとより蕩尽するか分を弁えるかは、個人の裁量、いや力量によるのだけれども。

［支部大会のご案内］

二〇二二年度　春季大会

日程：二〇二二年六月四日（土）
場所：オンライン開催
（Ｚｏｏｍウェビナーを使用）

※春季大会の参加方法につきましては、同封の別紙ならびに、関西支部公式ブログをご確認ください。ご参加には、事前申込が必要です。

【プログラム】

■開会の辞　関西支部支部長　佐藤秀明

■自由発表

第三次『新思潮』創刊号と出発期の豊島与志雄――同時代の文学潮流を視座に
河内美帆

戦中派世代の殺人――坂口安吾「復員殺人事件」と高木彬光「樹のごときもの歩く」
西田正慶

筒井康隆「東海道戦争」論――戦争体験の風化と当事者意識の欠落――
松山哲士

■特集企画

鴎外をひらく　鴎外没後一〇〇年
（趣旨説明・司会）浅井航洋・塚本章子
（発表者）八原瑠里・坂崎恭平・林正子
佐藤秀明

■閉会の辞

■研究発表

［自由発表要旨］

第三次『新思潮』創刊号と出発期の豊島与志雄――同時代の文学潮流を視座に

河内　美帆

豊島与志雄は、第三次『新思潮』創刊号（一九一四年二月）に「湖水と彼等」を発表し、作家としての一歩を踏み出した。同作を皮切りとした創作がほどなく既成作家の目に留まり、豊島は新思潮派のなかでいち早く文壇に躍り出る。それを後押ししたのは、当時の自然主義文学の牙城である『早稲田文学』の中枢を担う中村星湖や吉江孤雁といった文学者であった。

早稲田派から高い評価を得たのは、豊島作品が当時の自然主義文学に通底する象徴主義・生命主義的な傾向を共有していること、それらの理念と密接な関係を持つ神や生命の問題、また自然描写を随所に織り込んでいることに由来すると考えられる。そして、それはひとり豊島のみではなく第三次『新思潮』創刊号に寄稿した他の同人たちに共通する傾向でもあった。新思潮派は、芥川龍之介や菊池寛を典型として、反自然主義的な性格を持つというのが通説とされている。だがそうした通説の内容は、いまや再検討されなければならないだろう。

本発表では、処女作「湖水と彼等」の他に、豊島の出世作となった「恩人」「犠牲」について考察する。出発期を代表するこれら三作には、流行思想としての象徴主義・生命主義を作品に取り入れながらそれらを反転させるという試みを見て取ることができる。第三次『新思潮』創刊号の性格と早稲田派との関係を視野に入れながら、こうした試みの中に潜む豊島の批評性を明らかにすることが、本発表の狙いである。

戦中派世代の殺人――坂口安吾「復員殺人事件」と高木彬光「樹のごときもの歩く」

西田　正慶

坂口安吾「復員殺人事件」（『座談』四九・八～五〇・三→『宝石』五七・八～一一）は、作者の死により未完に終った長篇ミステリ小説である。荒正人と江戸川乱歩の推挙により、高木彬光が解決篇を補い、「樹のごときもの歩く」（『宝石』五七・一二～五八・三）として完成させた。

奥野健男は、戦後社会の既成価値や人倫の壊乱についての描写を評価したが、それ以来、本作に関する論考に目立ったものはない。しかし、安吾が遺した作品の結末を高木が改変した点は注目に値する。昭和二二年、小田原に闇稼業で財を成した一家を舞台に作品は展開する。当初、安吾が登場人物の美津子（二二）の単独犯行として構想していた筋書きに、高木は兄・定夫（二五）の関与を加えた。高木は〈戦中派〉の人間による凶行という要素を作品の核に据えたのである。

補筆によって生じたこのズレは、世代論に関する安吾と高木の認識の差異を際立たせる。安吾の批判意識は、アプレ・ゲール青年＝戦後派の特質を規定した『近代文学』派の言説に向けられていた。他方高木は、「戦後は終った」という認識の下で台頭した後続世代を、戦中派の立場から批判的に捉えていた。

本発表では、「復員殺人事件」および「樹のごときもの歩く」の合作という成立過程に照準することで、坂口安吾と高木彬光が、いかに自らを取り巻く世代論的言説と対峙したかについて考察する。作品の読解を通して、両者が「実感」にもとづき無意識に受け入れた世代論的なバイアスを相対化していることを明らかにする。

筒井康隆「東海道戦争」論――戦争体験の風化と当事者意識の欠落――

松山　哲士

筒井康隆「東海道戦争」（『ＳＦマガジン』一九六五年七月）は、情報の行き違いが原因で、大阪と東京が戦争をする短編小説である。石川喬司（一九六六）は、本作の戦争が、Ｄ・Ｊ・ブーアスティンの提起する、マスコミが出来事を創造する「疑似イベント」に関連すると指摘した。また、内田友子（二〇〇七）は、「疑似イベント」が野次馬を巻き込み、「戦争のイメージ」と現実とがすり替わる様を論じた。その他に先行論は、戦争の喜劇性やドタバタ性に言及した。しかし、本作の主要な登場人物が、戦争体験のない若者であることに注目した論はない。

本発表は、本作の若者が、戦争映画に影響を受けて戦争に憧れている点に着目する。この作中の若者像は、当時の実際の若者が、架空の戦争映画から戦争に「カッコいい」印象を抱いていたという傾向が関係する。筒井はそのような実在の若者の動向を捉え、「カッコいい面」や「ドタバタ的な面」を無視して戦争像はつかめないと述べ、作中の若者像に反映させた。だが、本作品の主要なテーマは、安全な環境から他人事として戦争を見、戦争を「カッコいい」と感じていた若者が、戦争に関与した途端、悲惨な運命をたどるところにある。戦争は誰の意志も介入できず、自らの命や身近な人の命を脅かすことを、「おれ」を含めた主要人物全員の死をもって描出するのだ。

以上より、本作は、憧れた戦争に翻弄される若者の姿を描くことにより、戦後二〇年当時における戦争体験の風化と、戦争への当事者意識の欠落を風刺したと論じる。

■特集　鷗外をひらく　森鷗外没後一〇〇年

［企画要旨］

二〇二二年、森鷗外は没後一〇〇年（生誕一六〇年）を迎える。これを機として、本年度の春季大会では、「鷗外をひらく」と題した特集を組み、現代小説から歴史小説、史伝、詩歌、戯曲、評論、日記、翻訳と幅広い創作活動を続けた森鷗外の文学に新しいメスを入れ、アクチュアルな鷗外文学の意義に迫りたい。たとえば、一見すると身勝手な男の述懐とも読める「舞姫」や、大逆事件に批判的な小説を発表する傍らで陸軍軍医総監に上り詰めて権力の側に立つアンビバレントな文学者の姿は、現代において、どのように捉えなおし、評価することができるだろうか。教育現場に目を向ければ、〈森鷗外〉は文豪という権威性の記号であるが、一方では、国語教科書からは鷗外の作品そのものは消えつつある。そのような教科書の鷗外の現状は、どのように考えられるだろうか。後続の文学に影響の大きい鷗外と他の重要な文学者との関係を今日あらためて問いなおすことで、鷗外文学のまだ見ぬ相を照らし出せはしまいか。没後一〇〇年（生誕一六〇年）を好機として、現在もなおさまざまな可能性をはらむ鷗外文学を新しい視点から繙読したい。

そこで、本特集では、まず弓削商船高等専門学校の八原瑠里氏に「森鷗外と横光利一――「国語教育」を視座として」と題し、国語教育の観点から鷗外と横光を比較することで、言葉に対する両者の問題意識についてご発表いただく。次に同志社大学の坂崎恭平氏に「〈あそび〉としての文学――二葉亭四迷から考える中期の諸作品――」と題し、鷗外の短篇「あそび」を取り上げ、二葉亭と鷗外のモティーフの共有から鷗外文学を今日にひらく可能性についてご発表いただく。最後に岐阜大学の林正子氏に森鷗外「〈Resignation〉の創作力――「鷗外文話」から史伝まで――」と題し、〈Resignation〉を鍵語として初期から後年まで通底する鷗外の思想的な基盤についてご発表いただく。会場からの質疑を受けて、鷗外文学を現代にひらく活発な議論を行いたい。

［発表要旨］

森鷗外と横光利一――「国語教育」を視座として

八原　瑠里

森鷗外は、日本文学を代表する作家であり、長きにわたり国語の教科書に作品が掲載されている。

本発表では、この「国語」あるいは「国語教育」を新たな視座として、横光利一という世代の異なる作家を補助線に、「森鷗外をひらく」試みをしてみたい。

横光は、親子ほど年齢が離れた鷗外の作品をどのように受容・評価しているのか。「河北新聞」（一九三三・六・九）では「日本の国語の美しさを充分に表現してゐるとお考へになるやうな作品は？」という問いに鷗外の「雁」を挙げている。先行研究では、座談会「新しい横光像を求めて」（『解釈と鑑賞』、一九八三・一〇）で、井上謙が横光の「笑はれた子」に鷗外訳のフレデリック・ミストラル「蛙」からの影響を示唆した。そして、宮口典之は「森鷗外と横光利一」（『森鷗外論集出会いの衝撃』、新典社、一九九一・一二）で、横光の「純粋小説論」以降の作品と「雁」における表現の共通性を指摘した。このように横光は鷗外の文学を高く評価し、その文学性にも共通点が多くみられる。

その一方で、二人が受けてきた「国語」の教育には相違点がある。藩校で学んだ最後の世代であり、「国語」の立ち上げを見守った鷗外と、最初に国定教科書を用いて「国語」を学んだ世代の横光。ここでは、言葉に対する二人の問題意識に焦点化し、その共通性を探っていきたい。世代の離れた作家の共通性を探ることは、それぞれの特徴だけでなく、日本文学に通底する意識を再考するきっかけになるのではないかと考えている。

〈あそび〉としての文学――二葉亭四迷から考える中期の諸作品――

坂崎　恭平

「文学は私には何うも詰らない、価値が乏しい。で、筆を採つて紙に臨んでゐる時には、何だか身体に隙があつて不可。遊びがあつて不可。どうも恁う決闘眼になつて、死身になつて、一生懸命に夢中になる事が出来ない。」――晩年の長谷川辰之助・二葉亭四迷はそう述べている（「送別会席上の答辞」一九〇八・七）。「国際問題」――平たく言えば、〈文学〉に対する〈政治〉――を主眼とする彼は、その一年後にベンガル湾上で客死し、多くの文学者がその死を悼んだ。

追悼文集とも言うべき坪内逍遙・内田魯庵編『二葉亭四迷』（易風社、一九〇九・八）には、鷗外もまた一文を寄せている。前年自身のもとを訪れた際、「暫く話してゐたが、此人の口からは存外文学談が出ないで、却て露西亜の国風、露西亜人の性質といふやうな話が出た。」という鷗外の回顧には、二葉亭が文学に「一生懸命に夢中になる事が出来ない」・「遊びがあつて不可」、という彼の自己認識が反映されていると言えるだろう。同時期に書かれた鷗外の短編小説「あそび」（『三田文学』一九一〇・八）は、コンテクストこそ違えど、〝〈あそび〉としての文学〟というライトモティーフを、二葉亭と共有している。官吏であり文学者でもある主人公・木村は、文学を「遊びの心持」でやっていくと揚言する。「筆と爆裂弾とは一歩の相違があるばかり」と云う二葉亭と比べれば、

木村の心持ちは多分に軽い。「国際問題」に対して真剣であるがゆえに文学に夢中になれない二葉亭と、そもそも「真剣も木刀もない」木村――同時期の鷗外の文学を、両者のいわばハイブリッドとして捉えることで、その可能性の一端を切り拓くことを試みたい。

〈Resignation〉の創作力
――「鷗外文話」から史伝まで――

林　正子

鷗外の随筆「予が立場」（『新潮』第一一巻第六号　一九〇九年一二月）で用いられたドイツ語「Resignation」は、漱石晩年の「則天去私」を連想させる、鷗外の心境を表現する言葉として知られる。「諦念」という日本語では表現しきれないとされ、時にフランス語「résignation」と表記される「Resignation」は、おもに鷗外の陸軍軍医総監時代の作品に見られるが、文学活動の初期から最晩年にいたるまでを貫流する鷗外文学の基調を表現する鍵語であると考えられる。今回の報告では、自明のようでありながらその実質は必ずしも分明ではない鷗外の「Resignation」の内実に迫ることをめざしている。

具体的には、『柵草紙』第二〇号（一八九一年五月）に「鷗外文話」の総題のもと掲載された一一編（うち六編の初出は、「舞姫」「うたかたの記」と同年の一八九〇年『國民新聞』『日本之文華』）など創作活動最初期の作品から、一九一六年四月陸軍省辞職、予備役編入後の「澀江抽斎」（『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』一九一六年一月～五月）はじめ一連の史伝作品にいたるまでを通底していると考えられる、鷗外文学の思想的基盤について考察する。

「鷗外文話」「其十、小説中人物の模型」の「わが小説を作るときは、いまだ先づある理想を得て業に就きしことなし。われは必ず先づ實在の人物を得るなり。さてこの人物に適ふやうなる性質次第に集まりて、遂にその一身に融合す。われ生れながらにして空に憑りてものを見出す能少し。故に先づ堅き地を得し上ならでは、自在に運動すること能はず。」などの記述を糸口として論を展開したい。

〈ゲスト発表者プロフィール〉

林　正子

神戸大学大学院文化学研究科単位修得退学後、岐阜大学教養部講師・助教授を経て、地域科学部教授。ハイデルベルク大学、ライプチヒ大学客員教授。二〇二一年、岐阜大学を定年退職。現在、岐阜大学名誉教授。主著として『博文館「太陽」と近代日本文明論――ドイツ思想・文化の受容と展開』（勉誠出版　二〇一七年）など。

■学会印象記　二〇二一年度秋季大会

自由発表

青木　亮人

武久真士氏の「三好達治の四行詩――同時代俳論の影響に注目して――」は、三好の四行詩が「ホトトギス」俳句における「写生」から示唆を得た可能性を論じた発表である。三好が俳句から影響を受けたことはすでに研究があるが、武久氏は三好の四行詩が「オーヴァーラップなど、多角的に主客合一的な表現」を駆使したことを作品解釈で示し、そこに「写生」を活かした節があること、また詩作品と読者の関係を再構成する試みがあったこと等を指摘した。

武久氏は虚子の「写生」論と斎藤茂吉の「実相観入」論の差異にも触れたが、質疑応答では両者の論に差異を見出しにくいのでは、と質問が寄せられたり、また三好が示唆を受けた俳句作品の有無についての質問等もあり、個人的に興味深い点が多々あった。例えば、客観写生とされる〈翅わつててんたう虫の飛び出る　素十〉の強烈な主観性は「ホトトギス」俳人には伝わるが、歌人の茂吉や他ジャンルの文学者は単なる観察と見なすかもしれない。三好が「写生」をいかに受容したのか、改めて考えさせられる興味深い発表であった。

パネル発表

西川　貴子

本発表は、明治三三年に大阪の金尾文淵堂で刊行された文芸誌『小天地』を取り上げ、その位置づけを検討したものである。まず司会の庄司達也氏より調査の経緯の説明があり、その後三者による発表が行なわれた。

掛野剛史氏の発表では、先行して刊行していた『新小説』や『文芸倶楽部』との比較から、『小天地』が二誌の動向を視野に入れつつ、特に『新小説』のように小説を中心に据える方向を目指していたことや、編集者・薄田泣菫の方針として「社会」欄にも力を入れていたことが指摘された。そしてそこに、後藤宙外と泣菫の親交や泣菫と松崎天民の関係性が働いていることを見てとった。

竹本寛秋氏の発表は詩欄、投稿欄から『小天地』の編集戦略を読み取るというものであった。氏は、先行論における「運動体としての創造力の弱さ」という評価を踏まえながら、しかし詩欄・投稿欄を具体的に分析することで、「劇詩」「言文一致詩」「詩劇」等への目配り、あるいは投稿欄に「小品」「四行詩」「今様」といった多様なジャンルの模索があることを指摘し、むしろ『小天地』では既存のジャンルから外に出る試みが探られていた点を示した。

最後の発表者・西山康一氏は、松崎天民の記事を中心に、『小天地』と新聞文化との関

わりや、雑誌の「社会」的傾向を明らかにした。氏は、天民の文章を挙げ、探訪記事（ルポ）が『小天地』で重視されたことを確認する。と同時に、天民のルポの特徴として、社会・人物を立体化し隠された〈裏側〉を覗き見せるような趣向や、詳細な描写・会話場面の多用など臨場感を出す手法が取られていた点を指摘し、編集メンバーのジャーナリストとしての意識や地方文芸メディアとしての戦略について言及した。

『小天地』を多角的に読み解こうとした本発表は刺激的であり、会場との議論も活発であった。例えば『文庫』との関係をどう捉えるか、また『明星』とのかけ橋としてもっと評価できるのではないかという意見や、天民のルポの位置づけについて、社会的事象や社会主義との関わりをどう捉えるか、さらには『小天地』に掲載された小説をどう捉えるか、等々。まだまだ読み解く余地が残っていそうである。二〇二二年一月に『小天地』復刻版が琥珀書房から出版（第一回配本）された。この魅力的な雑誌を手にとり読むことができる幸せを味わいつつ、ぜひ私なりのアプローチも見つけたい。

小特集　児童文学研究と文学館

目黒　強

この度、専門が児童文学であることから印象記の執筆依頼があり、会員外の稿者が担当させていただくこととなった。小特集では、「児童文学研究と文学館」というテーマのもと、講演とラウンドテーブルが企画されていたので、それぞれについて報告したい。

まずは、大阪国際児童文学振興財団理事長の宮川健郎氏の講演であるが、鳥越信氏が寄贈された児童文学資料を母体に、大阪府立国際児童文学館が開館した経緯を踏まえ、鳥越資料を切り口とした児童文学研究のデザインが提案された。

鳥越氏のアプローチは、文献・書誌学を基盤に据えたものであった。草稿からテクストの生成を検証する文献・書誌学のアプローチは、宮沢賢治などの作家には適していたが、現代児童文学作家には適用しにくい。そこで提案されたのが、子ども読者に本を手渡す媒介者や「声」を中心とした媒介行為に着目するアプローチで、児童文学の特徴を明らかにする試みとして示唆的であった。なお、宮川氏によれば、柄谷行人の「児童の発見」以降、児童文学概念を問い直すアプローチが主流となっているという。しかしながら、財団が取り組んでいる近代児童文学研究では、一次史料を収集し、そのデータを公開している。鳥越氏のアプローチが継承されていることを補足しておきたい。他には、あまんきみこ童話などに着目して童話伝統批判からなる鳥越史観を相対化していた点も、興味深かった。

次に、ラウンドテーブルであるが、宮川氏に加え、岡野裕行氏と森本智子氏が登壇された。岡野氏は図書館学の立場から文学館のあり方について、森本氏は宮沢賢治イーハトーブ館を中心とした文学研究を支える場所について、宮川氏に質問された。

岡野氏との質疑応答のなかで印象的であったのは、「文学的広場」の構築とそれを支える人々の育成である。宮沢賢治記念館も該当するだろうが、このような場づくりは文学館の役割の一つであると改めて考えさせられた。

森本氏の報告のなかで印象的であったのは、イーハトーブセンターが自治体の財政的援助を受けている点が財団とは異なっているとの指摘である。同センターのように、象徴資本が経済資本に還元される好循環を産み出す文学場創出の機序、ひいては、国語教科書への採録なども含めた、児童文学の正統化について議論を交わしてみたかった。

紙幅の都合、駆け足の報告となってしまった点をお詫びしなければならないが、問題提起に満ちた小特集の成果の一端を伝えることができていれば幸いである。

■書評

友田義行　責任編集

『フィルムメーカーズ22　勅使河原宏』

岩本　知恵

「多面体」。本書を一言で表現するなら、この言葉を置いて他にないだろう。責任編集者である友田義行は巻頭言にて、「多面体としてのフィルムメーカー・勅使河原宏を立体的に捉え、発信する試み」として本書を位置付けているが、その言葉通り本書は、勅使河原宏という存在とその作品を、多方面から研究し、分析し、紹介し、思考するという視座を持った書籍である。カラー写真や、勅使河原の作品を網羅したデータベース、年譜、著作目録、勅使河原の複数のエッセイの再録に加えて、作家論、作品論、芸術論のそれぞれの切り口から勅使河原宏という存在に迫る。各論考の切り口も多彩である。勅使河原と関係の深い人物からのインタビューを掲載し、著名な作品を個別に論じ、かつ記録映画への目配りも忘れない。更には武満徹の音楽、映画内に使用される古美術品についても言及する。独立した章立てにはなっていないものの、安部公房作品との共同についてや草月流第三代家元、父親としての顔などにも触れており、随所に「多面体」として勅使河原宏を捉えようという視点が感じられる。

このように、本書の構成を概観するだけでも、ある一人の人間が多面的な存在であると

いう、当たり前ではあるが、研究においてつい忘れてしまいがちな事実に気づかされる。そして本書を読み終わった後には、「勅使河原宏」という人物と彼の作品が、捉えきれない膨大な多面的な広がりとして目の前に提示される。誤解を恐れず言うなら、本書は、「勅使河原宏」を理解するための書籍ではない。その捉えきれなさと壮大さの入口へと読者を勧誘する書物である。

一方で本書に収められている各論考やインタビューは一般的な「入口」の比ではない質を保持している。特に「完全データベース」に収録された、フィルモグラフィーと著作目録の網羅は圧巻である。そして何より、本書そのものが「多面体」としての構成を持っていることは特筆すべきだろう。多数の執筆者陣による多方面にわたる専門領域からのアプローチは、まさに本書を「多面体」たらしめている。しかもそれは、長年培われた人間関係上の信頼によるものでもあるだろう。草月会館の資料室や元勅使河原プロダクション・プロデューサーの協力、俳優陣やご家族の証言など、本書には領域を横断する広さのみならず、時間的な積み重なりの深さまでもが底流しているのだ。

まさに本書は、「多面体」として勅使河原宏を提示した書籍である。

（二〇二一年六月二三日　宮帯出版社　二一四頁　二七〇〇円＋税）

■二〇二二年度　秋季大会
研究発表募集のお知らせ

日本近代文学会関西支部では、二〇二二年度秋季大会における自由研究発表を募集いたします。今年度の秋季大会での発表は、関西地区で開かれる日本近代文学会秋季大会での発表となる予定です。支部会員の皆さまの積極的なご応募をお待ち申し上げます。

◆日時・会場　二〇二二年一〇月二二日、二三日・同志社大学（予定）

※詳細は決定次第、関西支部公式ブログでお知らせいたします。

◆募集人数　自由発表　若干名

◆応募締切　二〇二二年七月一〇日（日）必着

◆応募要領　自由発表は、発表題目および六〇〇字程度の（応募段階における）結論までを書かれた要旨を封書でお送りください。発表時間は三〇分程度です。応募の際は、必ず連絡先（電話番号・メールアドレス等）も明記してください。発表に関して、ご不明の点は事務局までおたずねください。

【応募先】〒六三一―八五〇一
奈良市帝塚山七―一―一
帝塚山大学　文学部　西尾元伸研究室内

■会議の記録（二〇二一年度）

四月二九日（木）

【第一回運営委員会】二〇二一年度の各係と新運営委員の担当決めについて、会計（監査・総会発議と報告方法・予算案など）について、会報三三号について、次号会報三四号について、関西支部電子媒体機関誌発刊に向けて、最新版名簿について、二〇二一年度春季大会運営について（一）プログラムの確認、（二）特別展示実施開催問題、（三）企画委員より、（四）タイムスケジュール再調整、（五）休憩時間の扱い、（六）総会遠隔操作、（七）総会案件、（八）春季大会広報の件、二〇二一年度秋季大会について、和泉書院に向けての支部補助金の可能性について

〔オンライン開催〕

五月三〇日（木）

【第二回運営委員会】入会希望について、会報三四号について、二〇二一年度春季大会の運営について、二〇二一年度総会について、二〇二一年度企画展示について、二〇二一年度秋季大会の日程について

〔近畿大学およびオンライン開催〕

六月二七日（日）

【第三回運営委員会】二〇二一年度春季大会のふりかえり、会報三三号について、会報三四号について、会報三五号について、二〇二一年度秋季大会について、二〇二二年度春季大会について、会則第三条の文言変更、本部退会者の扱いについて、会費制移行等の検討について

〔オンライン開催〕

七月三一日（土）

【第四回運営委員会】入会希望について、謝金等の支払い方法（オンライン）について、会報三四号について、会報三五号について、二〇二一年度秋季大会について、二〇二二年度春季大会について、発表募集の文案について、本部退会者への意思確認について、会費制移行等の検討について

〔オンライン開催〕

九月一九日（日）

【第五回運営委員会】入会希望について、銀行口座情報等に関する用紙について、会報三四号の発表募集文について、会報三五号について、二〇二一年度秋季大会について、二〇二二年度春季大会について、会費制移行等の検討について、支部退会規程について、『関西近代文学』の原稿募集告知について、会報への訃報掲載について

〔オンライン開催〕

一〇月三〇日（日）

【第六回運営委員会】二〇二一年度秋季大会について、会報三五号について、支部長の選出について、訃報の扱いについて、支部ブログの機関誌専用ページの作成について、二〇二二年度春季大会について、会費制移行等の検討について、支部退会規程について

〔近畿大学およびオンライン開催〕

一一月二八日（日）

【第七回運営委員会】二〇二一年度秋季大会のふりかえり、会報三五号について、支部長の選出について、二〇二二年春季大会について、会費制移行等の検討について、支部退会規程について、入会希望について

〔オンライン開催〕

一月二九日（土）

【第八回運営委員会】会報三五号について、会報三六号について、二〇二一年度運営委員長および副委員長について、二〇二三年度支部長について、二〇二一年度決算の会計監査について、二〇二二年春季大会について、二〇二二年度新規運営委員候補者について、会費制移行等について、支部退会規程について

〔オンライン開催〕

二月二三日（水）

【第九回運営委員会】入会希望について、会報三五号について、会報三六号について、次期支部長について、二〇二二年度新規運営委員について、二〇二一年度決算の会計監査について、二〇二二年度予算案について、二〇二二年度春季大会について、会費制移行等について、支部退会規程について、二〇二一年度申し合わせと引き継ぎについて

〔オンライン開催〕

三月二八日（月）

【第一〇回運営委員会】会費制導入について、二〇二一年度申し合わせと引き継ぎについて、委員会業務スケジュールについて

〔オンライン開催〕

■事務局だより

◆献本のお願い

本会報では、支部会員の皆様が刊行された書籍を対象とする書評欄を設置しております。事務局では、書籍を随時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

○対象となる書籍…支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍

○送付先…関西支部事務局

なお、書評欄への掲載の採否、時期、および書評者の人選については、関西支部運営委員会にご一任ください。

◆維持会費納入のお願い

維持会費の納入者がたいへん少ない状況です。同封の振込用紙で、ご協力のほど、何卒よろしくお願いします。

◆**二〇二二年度運営委員**（＊は新規委員）

支部長 佐藤秀明

運営委員長 西尾元伸

運営副委員長 瀬崎圭二・中田睦美

〔会計・名簿〕 ＊熊谷昭宏・＊花崎育代・藤原崇雅・八原瑠里

〔会報〕 石原深予・＊永渕朋枝・福田涼・＊松田樹・禧美智章

〔企画〕 浅井航洋・斎藤佳子・＊東口昌央・長濱拓磨・光石亜由美・矢本浩司

〔広報〕 廣瀬陽一

〔書記〕 塚本章子・開信介・宮川康・吉川仁子

〔事務局補助〕 西薗有加利

◆**二〇二二年度編集委員**（＊は新規委員、その他は機関誌準備委員からの移行委員）

編集委員長 佐藤秀明

編集委員 太田登・＊木田隆文・＊木谷真紀子・＊田中励儀・檀原みすず・西尾宣明・＊増田周子

（運営委員、編集委員は六月四日の総会で承認を得る予定）

日本近代文学会関西支部事務局

〒六三一―八五〇一

奈良市帝塚山七―一―一

帝塚山大学　文学部　西尾元伸研究室内

日本近代文学会　関西支部

会報　三五号　二〇二二年五月一日

編集・発行人　佐藤秀明

日本近代文学会　関西支部

〒六三一―八五〇一

奈良市帝塚山七―一―一

帝塚山大学　文学部　西尾元伸研究室内

正誤表

会報三五号に誤りがありましたので、下記の通り訂正いたします。

正誤箇所	誤	正
6頁2段目18行	◆応募締切　二〇二二年七月一〇日(日)必着	◆応募締切　二〇二二年**六月一五日(水)**必着
6頁2段目19行	◆応募要領　自由発表は、発表題目および六〇〇字程度の（応募段階における）結論までを書かれた要旨を封書でお送りください。発表時間は三〇分程度です。応募の際は、必ず連絡先(電話番号・メールアドレス等)も明記してください。発表に関して、ご不明の点は事務局までおたずねください。	◆応募要領　①発表題目、**②発表要旨（八〇〇字以内）**、**③これまでの研究史における本発表の意義(四〇〇字以内)**を、関西支部事務局宛にお送りください。**発表は他学会等で未発表の内容に限ります。また、応募時に関西支部の会員であることが必要です。**発表時間は三〇分程度です。 ※発表要旨には、（応募段階における）結論までを書いてください。
6頁2段目 〔追記〕		**応募の締切りは、六月一五日（水）です。関西支部事務局宛に普通郵便（締切日必着）、もしくはメール(kindaikansai@gmail.com)でお送りください。なお、どちらの場合にも、必ず連絡の取れるメールアドレスと電話番号をお知らせください。**

❖子規短歌の本質に迫る

子規のうたごゑ

半田美永　二十代後半に、講談社で『子規全集』の編纂に関与した著者は、愛媛大学の和田茂樹教授の下で、子規資料の分類と解析の指導を受けた。当時を回想し、またその後の歩みから湧き出た思惟をエッセイ風に綴り、子規短歌の本質に迫ろうとした記念碑的な一書。

新刊・定価2200円(税込)

❖漱石から森見登美彦まで、短篇の構築性を解き明かす論集

問いかける短篇―翻案・童話・寓話―

木村小夜　視点人物の錯誤や死角・物語が孕む矛盾・構成上の断絶・変則的な因果の構図や定型からの逸脱・反復の中の変化に着目、原拠や周辺の諸言説との比較検討を通し、漱石・鷗外・芥川から三島などの戦後作家、さらに直近の現代作家の短篇に即して、その緻密な構築性を解明する。

新刊・定価5500円(税込)

❖昭和の文豪・井上靖の文学の解明を目指す

井上靖の文学―一途で烈しい生の探求―

高木伸幸　習作期から最晩年まで井上靖のほぼすべての代表作を取り上げ、その文学全容の解明を目指す。従来の井上靖論には見られない幅広く実証的な作品論とともに、貴重な資料篇を備え、研究史上に新生面を拓く画期的な一冊。

新刊・定価7480円(税込)

❖前五集の刊行より十年　たゆみない歩みを示す待望の続集

論集 泉鏡花 第六集

泉鏡花研究会編　十篇の書き下ろしの論考と、最も詳細な「参考文献目録」とを合せもって、泉鏡花研究の最前線を示すべく編集。

定価7700円(税込)

好評既刊(各税込)
第一集 6600円　第二集 6600円
第三集 5500円　第四集 6600円
第五集 8800円　◆六冊揃 41800円◆

❖結婚を相対化する主体と親密性の実践を文学作品より抽出

結婚の結節点
―現代女性文学と中途的ジェンダー分析―

泉谷 瞬　1980年代から現在に至るまで活躍する女性作家たちの小説を、結婚制度とそれにまつわる社会状況を照合しながら多角的に考察する。既存の「結婚」を相対化する主体と親密性の実践を、文学作品より探る。

定価3960円(税込)

❖『倫敦塔』研究の可能性を呈出する一冊

『倫敦塔』論集 漱石のみた風景

鳥井正晴・宮薗美佳・古浦修子編　作家・漱石の出発を告げる短篇『倫敦塔』を味い尽くす論集。気鋭の研究者たちによる多彩な論攷9篇に加え、明治～現在までの『倫敦塔』研究史と研究文献目録、評釈と机上鼎談、本シリーズ始末記、他を収録。

定価13200円(税込)

❖混迷する『明暗』研究に論と実証から迫る

『明暗』論集 清子のいる風景

鳥井正晴監修・近代部会編　論文14篇、『明暗』第二部の現地調査4篇、研究文献目録選を収録。定価7150円(税込)

❖漱石の自伝的小説『道草』論の可能性を極限まで追及

『道草』論集 健三のいた風景

鳥井正晴・宮薗美佳・荒井真理亜編　論文14篇に加え、大正～現代までの『道草』研究史と詳細な研究文献目録を収録。

定価8250円(税込)

❖鷗外研究に新たな領域を切り拓く

森鷗外初期翻訳作品の国語学的研究

藤田保幸　森鷗外の初期文学活動の成果をまとめた創作・翻訳作品集『水沫集』所収作品を中心として翻訳作品の訳文に国語学的分析を加え、鷗外の翻訳言語・初期の文業の特質を明らかにする。種々の文法的な分析に基づき、鷗外が試みた新時代の文学言語のスタイルの諸相を探る。

新刊・定価8800円(税込)

―日本近代文学会関西支部編―

鉄道 関西近代のマトリクス

和泉ブックレット1　定価990円(税込)

近代文学のなかの〝関西弁〟
―語る関西／語られる関西―

和泉ブックレット3　定価1210円(税込)

文学研究における継承と断絶
―関西支部草創期から見返す―

和泉ブックレット5　定価1100円(税込)

海を越えた文学 日韓を軸として

和泉ブックレット7　定価1100円(税込)

村上春樹と小説の現在

定価2640円(税込)

作家／作者とは何か
―テクスト・教室・サブカルチャー―

定価3960円(税込)

大阪近代文学事典

日本近代文学会関西支部大阪近代文学事典編集委員会編
和泉事典シリーズ16　定価5500円(税込)

滋賀近代文学事典

日本近代文学会関西支部滋賀近代文学事典編集委員会編
和泉事典シリーズ23　定価8800円(税込)

兵庫近代文学事典

日本近代文学会関西支部兵庫近代文学事典編集委員会編
和泉事典シリーズ26　定価5500円(税込)

京都近代文学事典

日本近代文学会関西支部京都近代文学事典編集委員会編
和泉事典シリーズ29　定価6380円(税込)

〒543-0037　大阪府大阪市天王寺区上之宮町7-6
TEL 06(6771)1467 ／ FAX 06(6771)1508

和泉書院
https://www.izumipb.co.jp
e-mail：izumisyo@silver.ocn.ne.jp
いずみ通信呈上
価格は10%税込　(2022.5)